

休日の午後。駅前のカフェは、窓から差し込む柔らかな西日で満たされていた。お気に入りの窓際の席で、私は読みかけの文庫本と、湯気の立つカフェラテを前に、穏やかな時間を過ごしていた。

（ああ、幸せ……。明日からまた仕事だけど、今日は思いっきり羽を伸ばそう）

そんなありふれた幸福感に浸っていた、その時だった。

テーブルの上に置いていたスマートフォンが、けたたましい警告音と共に激しく振動した。その音に、周囲の客たちが一斉にこちらを振り返る。私は慌てて端末を手を取った。画面には通知が出ている。

【強制性交命令】

指先から急速に血の気が引いていくのがわかる。

（嘘、でしょ……？）

『強制性交法』。少子化対策の最終手段として、この国で施行された法律。

政府が管理する国民総背番号と連動した公式アプリが、遺伝子情報や社会的適合性などを総合的に判断し、最適と見なされた未婚の男女のペアに「性交」を強制する。命令は絶対。基本的に拒否権はない。拒否をしたとしても、逮捕されるようなことはないが、学校・職場などに通知され、社会的な制裁がある。だから通知が届いた人間は、命令に従う者ばかりだ。

（なんで、私が……？）

とはいえ、選ばれるのは相性が80%以上とみなされた者だけ。そうそう会えるわけでもない。都会に住んでいれば人口が多いから機会も多いだろうけれど、地方に住む私には縁のないこと。そう高を括っていた。

それに、さっきから周囲の視線が痛い。誰もが、私が「選ばれてしまった」ことに気づいている。同

情、好奇心、あるいは軽蔑。様々な感情が入り混じった視線が、無遠慮に突き刺さる。

いたたまれなくなった私は、逃げるように店を飛び出した。

背中に突き刺さる視線がなくなり、少しだけ和らぐ。けれど、手の中で絶え間なく震え続けるスマートフォンが、これは夢ではないのだと現実を突きつけてくる。

（信じられない……。私が、本当に選ばれるなんて……）

震える指でアプリを開くと、相手と連絡が取れる事務的なチャット欄からメッセージが届いていた。

『通知、届きましたか？ 驚かせてすみません。今後に関して相談しましょう！』

（驚かせてすみません、か……。向こうも私みたいに驚いたよね……）

私が『届きました』と返信すると、すぐに次のメッセージが届いた。

『一週間に会わないといけないけど、時間はいつなら平気ですか？』

『基本的には夜6時まで会社なので、それ以降でお願いします』

『今日はこの後大丈夫ですか？』

「えっ！ ……今日……？」

『もちろん今日じゃなくても大丈夫です！』

今日じゃなくても大丈夫。それは正直嬉しいけれど、どっちにしろ一週間以内には必ず会わなければいけない。

私は少し迷ったけれど、『今日はお休みなので、大丈夫です』と送った。

『ありがとうございます！ 人目があるので、こっちで場所は指定させてください。さっきホテルの予約を取ったので、ここまで来てください。呼びつけ

るような形ですみません！』

「え！ここ、高級ホテルなんだけど……！」

指定されたホテルは県で一番有名なホテルだった。百年以上続くホテルで、歴史もあって人気もあるけれど、値段が高い。それでも何ヶ月先まで予約が埋まっているらしい。

それなのに、今日いきなりその部屋を取ってしまうなんて。

（すご、どんな人なんだろ……）

『フロントで、今井の連れだと話してもらえれば、部屋に入れます！』

「今井さん、って言うんだ……」

（推しと同じ苗字だ。鈴木さん、とか高橋さんよりはずっといいや。ちょっとだけ、この人でよかったかも）

そんなことを思いながら、タクシーを拾って指定

された有名ホテルまで向かった。

そしてホテルに到着し、フロントで名前を告げると、スタッフは恭しくカードキーを差し出してきた。「お待ちしております」という言葉が、これから始まる非日常への招待状のように聞こえた。

（ま、まさかの、最上階だなんて……本当にどんな人なの……？）

乗ったエレベーターが最上階に着いた。指定されたスイートルームの前に立ち、カードキーをかざすと、ピッ、という乾いた音と共に、扉が開いた。

「……あ、あの……失礼します……」

部屋の中は、窓から見える夜景の光だけで満たされていた。広いリビングのソファに、一人の男性が深く腰掛けていた。逆光で顔はよく見えない。けれど、そのシルエットだけで、彼が並外れたオーラを纏っていることがわかった。

「……あ、無事に来てくれてよかった。今日はありがとう」

その声を聞いた瞬間、心臓が跳ね上がった。

聞き覚えがある。いや、聞き覚えがあるどころではない。毎日、テレビや街中のビジョンから流れてくる、あの声だ。

彼がゆっくりと立ち上がり、私の方へ歩いてくる。その顔を見て、私は息を呑んだ。

「コ、コウガ……！」

(……え、嘘嘘嘘。うっっっそ！？)

整いすぎた顔立ち。涼しげな目元。そこにいたのは、今、日本で知らない者はいないと言われる国民的人気アイドルグループのセンター、『コウガ』だった。

彼は国民的アイドルグループ『Starlight Parade』の絶対的センターで、本名は今井光芽。キラキ

ラと輝く笑顔、甘いマスク、爽やかで非の打ち所がない『王子様』。テレビや雑誌で見ない日はない、まさに日本の宝とも言えるトップアイドルだ。

そして私がデビュー時からずっと推している人だった。

「俺のこと知ってるんだね、嬉しいな」

「え、あ。え……」

ありえない。何かの間違いだ。システムのエラーに決まってる。私みたいな、どこにでもいる一般人と、雲の上の存在である彼がマッチングされるなんて、天地がひっくり返ってもありえない。

混乱する頭で、必死に否定の言葉を探していると、スマホ画面に新たなウィンドウがポップアップした。

【パートナー対面確認。強制発情を開始します】

その文字を見た瞬間、身体の奥底から、何かが強制的にこじ開けられるような感覚に襲われた。

「……っ、あ……」

下腹部の、さらに奥。子宮のあたりが、じわりと熱を持った。内側からじわじわ溢れ出てくるような熱で、あっという間に全身へと巡っていく。

（なに、これ……？ からだが、おかしい……！）

膝の力がふっと抜け、私はその場にへなへなと崩れ落ちそうになった。下腹部の奥から、せり上がってくるような強烈な熱。それは血管を通して指先、つま先、そして脳までを一瞬で侵食していく。

「はっ♡、あ、はぁ……っ♡ な、に……これ……っ♡」

（やだ、っ！♡ 身体が、熱い……っ！ 推しの前なのに、変な感じになっちゃう……っ！）

太ももの内側が、じわじわと湿り気を帯びていくのがわかる。私の意思とは無関係に、身体は目の前

の『パートナー』を迎え入れるための準備を勝手に始めていた。

「……はは、マジか。ニュースで見てたけど……本当に、こんな感じになるんだね」

光芽さんの顔も、みるみるうちに赤く染まっていく。テレビで見せる完璧な笑顔が消え、呼吸が荒くなり、その瞳には今まで見たこともないような、熱く、ギラついた「雄」の光が宿り始めていた。

「っ、はぁ。……やばいな、これ。身体の芯が、焼けるみたいに熱い……っ」

光芽さんはふらつく足取りで私の方へ近づいてきた。

（ち、近い……っ！）

至近距離で浴びる、彼の熱い吐息。鼻腔をくすぐ

る、香水と体温が混ざり合った匂い。それだけで、私の発情はさらに一段階跳ね上がる。

「あ、あっ……♡」

シーツに沈み込む私の身体に、光芽さんの影が覆いかぶさった。

「あ、っ♡ 光芽……さん……っ♡」

「……ねえ。君も、俺と同じくらい熱いの？♡ ……そんなにトロトロした目で見つめられたら……俺も我慢できないよ」

光芽さんが、崩れ落ちる私の身体を支えるように、そっと肩を抱き寄せた。指先が触れるたびに、身体がびくんっと跳ね、喉からは抑えきれない甘い声が漏れ出した。

「んあっ、はあっ……っ♡」

（ひ、指が触れるだけで、火が出そう……っ！♡

コウガ様……っ、光芽さんに……っ、もっと、もっと触られたい……っ！♡)

「国の法律だもんね、従わなきゃね……♡」

光芽さんは私の耳元で、低く、甘く、けれど拒絶を許さないトーンで囁いた。そのまま彼は、私の手首を優しく、けれど確実に掴み、リビングの奥にある巨大なキングサイズのベッドへと私を導く。

「ここに座って」

下着の中が、じゅわりと濡れる感覚。一度それを自覚してしまえば、もう駄目だった。堰を切ったように、熱いものが溢れ出してくる。それは自分の意志ではどうにもできない、生理的な反応。太ももの内側を、何かが伝っていく不快な感触。

「ん……っ、く……♡」

口から、甘ったるい嬌声が漏れそうになるのを、